

「一期治療・二期治療を行った重度の上突症例～一期治療の意義を考える」

山形県開業 松岸歯科医院 松岸 潔

【症例】初診時年齢8歳8ヶ月の女児。

【主訴】上の歯が出ている。口が閉じにくい。

【現症】上顎前歯の著しい唇側傾斜とオトガイ部の後退で口唇閉鎖が困難であった。Overjet 8.1mm, overbite 3.5mm。臼歯関係はアングルⅡ級。前顔面部に対し後顔面部の劣位が伺われた。パントモでは上下顎左右第三大臼歯までの歯胚が確認された。

【診断】下後退顎，上突咬合，叢生歯列弓

【一期治療方針】永久歯の抜歯による二期治療は必須であったが，前突感の改善と口唇閉鎖の向上を目的に上顎にセクショナルアーチ（2×4）とhead gearを装着した。

【一期治療結果】上顎前歯は十分後退し側貌も改善した。Overjet 3.9mm、overbite 4.1mm。後退した上顎前歯を維持するためプレートタイプのリテーナーを装着したが使用が不十分であった。経過観察中に上顎前歯は再び唇側傾斜し、下顎骨は下方へ成長した。12歳11ヶ月に資料採得し再診断したが二期治療は希望しなかった。

【二期治療開始時】15歳10ヶ月になり二期治療を希望。この時も下後退顎，上突咬合，叢生歯列弓。オトガイ部の後退感が強い。Overjet 6.7mm, overbite 1.8mm。臼歯関係は完全なⅡ級。叢生と臼歯関係の改善には小臼歯抜歯だけでは不足で、大臼歯の追加抜歯か，外科的矯正治療も考慮する必要があった。外科的矯正治療は希望しなかった。一期治療でのhead gearがあまり協力的でなかったので、上下顎左右第一小臼歯に加えて上顎は左右第一大臼歯を抜歯することにした。

【治療経過】上顎左右第一大臼歯を抜歯し上顎にマルチブラケットを装着，第二小臼歯を遠心移動し，下顎第二大臼歯と咬合したところで上下左右第一小臼歯を抜歯し，下顎にもマルチブラケットを装着した。上顎犬歯の遠心移動を進めながらレベリング。上顎前歯の後退時に同時に上顎第二大臼歯の近心移動も行った。右上顎第三大臼歯は萌出して来たのでブラケットを装着してコントロールした。上顎前歯を十分後退できたので側貌は改善できた。保定には、上下顎前歯部にFSWを装着したが、左上顎第三大臼歯は未萌出だったので、プレートリテーナーを併用して萌出位置を確保した。

【考察】初診の時点で、顎態や成長予測、第三大臼歯の歯胚の有無などから、二期治療開始時の顔貌や咬合を予測できた症例である。一期治療の目的は、主訴の改善、前突した上顎前歯を後退させることで外傷などのリスクを軽減、またこの時期に顎関係に介入することで二期治療の困難さを軽減することなどが挙げられる。二期治療開始時に初診時に近い状況を呈し、6本の抜歯を要することが初診時に予測できたとすれば、一期治療をしないという選択もありえる。しかしながら患者の主訴を改善するという観点からは一期治療が不要であったとは言えない。予想された仕上がりに対して、どの程度の一期治療とすべきかを熟慮し、患者が納得できるようにしっかりと説明することが重要である。

【略歴】

松岸 潔（まつぎし・きよし）

1989年3月 新潟大学歯学部 卒業

1989年4月 新潟大学大学院歯学研究科 入学 歯学矯正学教室 入局

1993年3月 新潟大学大学院歯学研究科 終了

1995年3月 新潟大学歯学部歯科矯正学教室 退職

1996年4月 松岸歯科医院 勤務

現在に至る